

# 山形県現代俳句協会会報

第25号

令和3年10月

## 俳人たちとコロナウィルス禍

山形県現代俳句協会会長 大類つとむ

新型コロナウイルスの蔓延は、やや収束の兆しが見えてきたものの、では来年の今頃はと考えるとき、どうしても何もかもがすっかり以前の様子になっている光景を頭に描くことはできません。

当会の活動も一般社会の状況にもれず、昨年からは会員が集う活動を休止しています。しかし、先が見えない中でも手を掛けている訳にもいかず、現代俳句協会の中村和弘会長に選句をお願いして紙上大会を企画いたしました。今回の会報には、その結果を中心に据えて掲載したところですので、よりよい句づくりへの一助となれば幸いです。

さて、当然のようにコロナ禍を詠んだ句をそちこちで目にするようになりました。日本国中いや世界中に共通した災禍ですので、その性質はかなり異なっても、十年前のあの東日本大震災の時のように膨大な数の句が生まれ出ることには至極当然なことでしょう。あの折は、災禍を詠んだ句を発表した高名な俳人がおられる一方で、一句も詠もうとしなかった方もおられまし

た。決して比較するものではありませんが、事態の受け止め方は、あの時と共通したものに違いありません。

俳句に限らず、美術・音楽・工芸・芸能・文学など、あらゆるものに共通していることです。が、私たちは句をつくるときに「何を、如何に」の壁に挑みます。幾つかの大会の選などをしていると、コロナ禍関連の聞き慣れない言葉が数多く見受けられます。かつて「冬のソナタ」の大ブームの時には、「冬ソナや」などとする安易な表現を目にすることが少なくありませんでした。全てではないものの、コロナ禍を詠んだ多くの句には、この時と等しい感触がどこかにあります。「何を」はそれぞれ良しとしても、「如何に」に臨むとき、掘りの浅い浮薄な作が大多数と見受けられます。ある対談の中で片山由美子氏の「どこか流行語のようになっていく：。」という発言が忘れられません。

「今を詠む」とは、最新の言葉をつかうことでは勿論ありません。「新しい俳句」は「鮮しい俳句」であると私は思っています。



## 現代俳句の秀句を読む 2

虫の息でジャコメッティの樹氷たち 田川飛旅子

「陸」を創刊し主宰した田川飛旅子。第一句集から第七句集後までの自選句を集めた『田川飛旅子読本』。この本に巡り合え、俳句と共に歩まれた先生の、人生の楽しみ、発見、共感などに触れる貴重な時間を得ることができた。

その中で一番惹かれたのが掲句である。先生が蔵王で樹氷に初めて出会い、昭和五十二年に発表された句である。「ジャコメッティ」は針金のように手足の細く長い人物像を代表とするスイスの彫刻家である。「虫の息」は息も絶え絶えの様子であり、寒風吹きすさぶ山中で必死に耐えている「樹氷たち」はアイスモンスター雄姿とは程遠いものだった。

この「樹氷たち」は、私が長年携わった障がい児教育で出会った子供たちの姿とオーバーラップする。「虫の息」は、彼らとその保護者の抱える心の辛さや痛み。泣き声は耳に届くけれども、本音はかすかで十分にはとらえにくい。それでも、寄り添いたい一心で彼らと学校生活を共に過ごし、一歩でも前へと学びを共にしてきた。彼らの唯一無二の個性に出会い、共に成長した日々は私にとってかけがえないメダルとなっている。

私が俳句を始めたばかりの平成十年の秋、「山刀伐に立つ初蟬に取りまかれ」の句碑開きで、来県された先生にお会いする機会に恵まれた。自分を大事にした俳句をという先生のエールを忘れず、今後も自分の五感を磨き俳句を続けていきたい。

最後に前述の読本の「俳句を始める人のために」から引用したい。

- 一、形式や約束を守って自分の意図を表現
- 二、作者独自の発見と把握を
- 三、関係のない二つのものを写生で同時に発見し、それを新しい角度で結びつけてみる

「陸」阿部雅子

県現代俳句協会紙上句会

七月二十日まで皆様より投句していただいた七十二句を、中村和弘現代俳句協会会長にお送りして、選と講評をいただきました。ご多忙の中、感謝申し上げます。（事業部 新野祐子）

1 デスメタル脳に不眠の夏至の夜 島田高志  
2 盗まれた恋の色ですさくらんば "  
3 紫陽花の雨のちぎりの詮も無き "  
4 ぶらんこは母さんの膝まるい雲 工藤博司  
5 梅雨明ける造船工場の昼汽笛 "  
6 ねじり花一本だけの存在感 "  
7 貼り葉張つて元氣や走り梅雨 黒谷博楽子  
8 月蝕のひかりを逃げる花あやめ "  
9 郭公の声が剥がれる昼の空 "  
10 冴返る指先に月昇り来る 柏崎青波  
11 いさかいのマスクにおおう怒りかな "  
12 朧夜のあるひとことの朧かな "  
13 深呼吸して風鈴の一つ鳴り 大泉秀明  
14 十葉や工事現場を包む風 "  
15 熱帯夜外からロック漏れてくる "  
16 一日を大事に生きてさくらんぼ 小林美代子  
17 九十路まだ煩惱は無限なり "  
18 半夏生コロナにおびえ老い縮む "  
19 おろおろと喧嘩を分けり扇風機 大類響子  
20 綱引きに動かされゆく梅雨曇り "  
21 花合歓や三輪車まだ見つからず "

22 長堤を駆けゆくナイン風薫る 木嶋玲子  
23 梅雨空を劈くブルーインパルス "  
24 煩惱の消えゆく風や江戸風鈴 "  
25 サンサーンスの旅はつづけり藤寝椅子 大類つとむ  
26 開帳の山滴れり妻と見る "  
27 一切をはたと止めたる油虫 "  
28 老い二人の陋屋百花のクレマチス 鳥羽しま子  
29 あじさいの色とや人の昨日今日 "  
30 辺の辺の静寂重たし釣鐘草 "  
31 農捨てし身にやさし過ぎ植田風 渡辺竹女  
32 八月や靴音ずんずん近づきぬ "  
33 逢えなくて春の日溜りもて余す "  
34 桜桃や男のために死ねるひと 津田よね子  
35 青服の女へ真直ぐ合歓の花 "  
36 大福の豆ごろごろに濃紫陽花 "  
37 梅の実や爺に任せて筵敷く 松浦廣江  
38 乾燥機匂い残して送り梅雨 "  
39 方丈の気迫伝わる夏衣 "  
40 音沙汰のないまま今日も暮れて梅雨 大志田勇志  
41 蛙無き池に蓮の花一輪 "  
42 螢火や我は眩暈として存す "  
43 半世紀ぶり先輩と会ふ夏テラス 井上康子  
44 白つじ見事に咲かせ師は黄泉へ "  
45 青ぶだう武士が開墾したる丘 "

46 たくらみの匂つて来るよ栗の花 東海林光代  
47 外来種の菊捨つべしと役場指示 "  
48 嚇々と水平線切る大西日 "  
49 パトカーを躲してしまふ夏つばめ 堀尚子  
50 がんばれと言はれたくない墓 "  
51 猛暑日や涸れてしまひしボールペン "  
52 母の日のどの絵も我が子見つめけり 須藤結  
53 筆洗のブルー流して夏休み "  
54 白桃の冷えて秘密を聞き出しぬ "  
55 熱癒えぬ山河に炎ゆる日が昇る 佐竹伸一  
56 炎天や光遮る雲の無く "  
57 草を刈る柚道天へ続きおり "  
58 霜害の桜桃畑ため息よ 瀬野史  
59 曇天を押し上げ出羽の青田波 "  
60 送り梅雨町を呑みこむ泥津波 "  
61 撒水車よぎり言霊よみがえる 新野祐子  
62 どう救う蝙蝠の子の地に落ちて "  
63 日盛やいよよ馴染めぬ電子音 "  
64 サンダル底ぐにやつとくずれチョコのごと 阿部雅子  
65 甘酒や粥米糍の炊飯器 "  
66 九十路の母より継ぐ種のだちや豆 "  
67 朝まだき半夏一つの紅の花 畠山カツ子  
68 半夏生五輪パラリンコナへの禍 "  
69 天高し愚直であれと諭す父 "  
70 背伸びして一人が届く朴の花 松田佳津江  
71 卯の花腐し図書室に一人きり "  
72 虎杖やカンカン照りの日本海 "

## 選者紹介



中村和弘先生

「陸」俳句会主宰。  
現代俳句協会会長  
(第7代 2018年～)

## 【特選】

## 方丈の氣迫伝わる夏衣

松浦廣江

〈方丈〉は、一般的にお寺の住職。方丈さんと呼んだりする。〈氣迫伝わる〉と夏衣の住職を表現したところがよい。大暑そしてコロナ禍にもめげることのない方丈の逞しい姿が目に見え。

## 螢火や我は眩暈として存す

大志田勇志

眩暈は普通体の不調からおこる。その原因は多種であろう「あら苦し目まひや…」(謡曲・卒塔婆小町)等にも現れる。作者はそんな眩暈あるゆえに我あり、と思つた。螢火がそんな折、強く美しい。いやそれゆえの眩暈かとも。直接関係はないが私の師田川飛旅子の句に「弱きとき最も強し葦咲く」をふと思ひ出した。

## 青ぶだう武士が開墾したる丘

井上康子

幕藩体制の下、貧しい小藩等の武士は開墾等農業に従事した。また幕末戊辰戦争に敗れた会津藩等の武士がその地を追われ下北半島、北海道の開拓に従事させられた事はよく知られている。今、その丘に葡萄が青々と垂れる。開墾にあつた武士も忘れ去られようとしている。

## 熱癒えぬ山河に炎ゆる日が昇る 佐竹伸一

病気の熱もやつとひいた。夏、炎えるような朝日が昇り山河を照らす。人間を時に苦しめる熱、夏の炎えるような太陽熱、その取り合せがユニーク。炎ゆる日差が今度は山河そして人々を苦しめることにも。

## 【秀句】

## 梅雨明けの造船工場の昼汽笛 工藤博司

造船所に昼の汽笛、新造船の進水式でもあるのだらうか。その理由は定かではないが、梅雨明けの雰囲気がある。

## 深呼吸して風鈴の一つ鳴り

大泉秀明

深呼吸をした途端、近くに吊るされていた風鈴がチリンと鳴った。因果係があるような無いような…。いやあるかもしれない。

## 逢えなくて春の日溜まりもて余す 渡辺竹女

コロナ禍中、なかなか友人知己にも会えない。庭の春の日溜を毎日眺めるのに少し倦きてきた。ああ、と言う作者の声も聞こえそう。

## 日盛やいよよ馴染めぬ電子音

新野祐子

パソコンにスマホ等々、電子音にとり囲まれての生活。決して快い音でないのに、日盛ますます馴染めない、そんな今日の生活。

## 背伸びして一人が届く朴の花

松田佳津江

桜でも桃の花などでも駄目。〈朴の花〉が良いと思う。同じ内容でも季語によって死んだり、またこの句の様に生きたり。

## 【佳作】

花合歓や三輪車まだ見つからず

大類響子

長堤を駆けゆくナイン風薫る

木嶋玲子

老い二人陋屋百花のクレマチス

鳥羽しま子

青服の女へ真直ぐ合歓の花

津田よね子

乾燥機匂い残して送り梅雨

松浦廣江

猛暑日や涸れてしまひしボールペン

堀尚子

どう救う蝙蝠の子の地に落ちて

新野祐子

卯の花腐し図書室に一人きり

松田佳津江

## 【一句自解(特選句より)】

〈方丈の氣迫伝わる夏衣〉の句に特選をいただきとても嬉しいです。方丈の逞しい姿が浮かぶとの評を戴きました。

衣を着けた九十六歳の方丈の所作の姿は眩しく、正しい。コロナ禍前までは毎年のように上京されていました。流れるような筆使いの書や絵をかかれ一人で過ごされています。

窓を開け放しお香を焚き数カ所の仏前に朝のお勤めをするのが日課です。私は方丈様のお話と笑顔に元気を頂いています。(松浦廣江)

## 選者コメント

なかなかベテランの方々の句が多いですね。季語の用い方をみれば分ります。コロナ禍中、当分はこのような形や、パソコンでのオンライン句会になりそうです。力作を期待しています。



## 俳句とエッセー

## 終戦



渡辺竹女

生きてゐる限り八月十五日

鶴巻蒼白

私が太平洋戦争の終戦を迎えたのは国民学校（現小学校）五年生の八月十五日だった。その前日迄、毎日幾度となくラジオから流れる大本営発表のニュースは日本軍の華々しい戦果だけだった。しかし、人々の暮らした日に日に逼迫してきていた。身の回りのすべての物資が不足し、食べるものも激減してゆく様子が子供の私たちにもひしひしと伝わってきた。銃後の母親達が、家族を飢えから守るために必死で食料調達をしている姿が脳裏に焼き付いている。

鉄砲の弾丸を作るために、鉄・銅類の回収が始まり、役場の職員や隣組長等が各家々に突然やつて来て、置物や囲炉裏の自在鉤等を没収して行った。また、校門前に建っていた本家の曾祖父の等身大の銅像が供出された時には、全校生徒が万歳三唱で見送ったが、子供心にも感極まるものがあったことを今も忘れることはない。また、飛行機の燃料となる油を搾るため、十四五歳の兄たちは松の根っこ堀りに動員され、毎日五km程離れた山に徒歩で通い働かされていた。どれ程の松根油が取れたことだろう。

その頃、空襲が激しくなった都会から逃れるた

めに、子供だけが親元を離れて田舎の親戚等に預けられ、地元の学校に編入される学童疎開の子が増えてきた。私達のクラスにも三人の男子学童が加わった。どの子も都会育ちにしてはおとなしく頭の良い子ばかりだった。

その中に、特に目立つほど賢く色白のK君がいた。普段ほとんど口を利くことはなかったが、どんな質問にも丁寧に答えてくれる、親切で内気な、どこか寂しさの漂っているような印象の子だった。K君は、いつの間にかクラスの男の子のいじめの的になつていた。いつも大勢の男の子に囲まれ、半暴力的に弄られからかわれている姿しか記憶に残っていない。どうして毎日いじめをするのか、何でいじめられるのか、私にはその理由や男の子たちの心境が判る筈はなかったが、ただ理不尽の念に駆られながら見て見ぬ振りをしている毎日だった。それに、担任の先生もK君を嫌っていたことは何となく判つていた。それでもK君は休むことなく登校していたように思う。どれ程辛く悔しい日々だったか、K君の心境は到底計り知ることはいかない。

やがて、歴史的な八月十五日を迎えた。すべてが立ち直れないような状況だったが、翌朝のあの澄んだ空気の匂い、辺りの異常なほどの静けさ、そして改めて空の広さに気付いた一刻だった。

それから何日くらい経つただろう。教室にK君の姿はなかった。私は思わず胸を撫で下ろしていた。きつとやさしく温かい両親の元に帰り、思い切り抱きしめられているであろうK君を想像し、どっと溢れる涙を止めることができなかった。

辛くて長い長いK君の戦争もやっと終わったのだ

## 令和三年度

## 山形県現代俳句協会総会書面評決結果

回答 二十五名

一、令和二年度活動報告及び決算について

賛成 25 反対 0

二、令和三年度活動計画及び予算案について

賛成 25 反対 0

三、令和三年度会費徴収について

賛成 24 反対 1

## 〈編集後記〉

◇コロナ禍のトンネルの出口から差し込む光が遠くに見えてきたが、変異型の拡大もあって樂觀は許されない状況が続いている。多数が集まる機会は、今しばらくは難しいだろう。

現代俳句協会では、「俳句自由」を掲げ、俳句の表現形式の基本を踏まえつつ、自由で多彩な表現、自由な内容の句を求めている。果敢に挑戦し、新鮮で広く深い句を発信し続けている俳人は少なくない。そのような句に数多く触れて、コロナ禍の日々を自らの殻を破る機会にしたい。

(佐竹伸一)

会報25号 令和三年十月発行

発行人 大類つとむ

発行所 山形県現代俳句協会

〒九九九-四二二七

尾花沢市中町五-二〇

〒九九七-〇〇四四

事務局 鶴岡市新海町二三一-八

堀 尚子